

## ミニ・シリーズ：オマーンの野菜栽培（2）

### その2：サラララの野菜栽培

サラララはオマーン南部のゾファール地方に属し、同国第2の街である。また北部のバティナ海岸地域とともにオマーンを代表する伝統的な農業地帯でもある。7月から9月まではモンスーンにより定期的に降雨があり、背後の山岳地帯が雨水、霧水を貯留しその伏流水を汲み上げ灌漑している。ここではオマーンの特産であるナツメヤシは多湿を嫌うため生育できないが、ココヤシやバナナが栽培されている。当地の畑の形態はココヤシが植えられその下にバナナやパパイヤが、最下層に野菜、牧草が栽培されている。野菜はキャベツ、カリフラワー、トマト、メロン、スイカ、ニガウリ、キュウリ、ダイコン、インゲンマメ等が栽培されている。当地ではダイコンは根ではなくおもに葉を食する、よって根は日本でよく見られるものよりもかなり小さい。また伝統的農業地帯であるため栽培法もちょっとした工夫がなされている。例えばココヤシの剪定した枝葉を地面からの蒸発を押さえるためマルチとして利用している。それは果菜類に対してはマットの役割も果たしている（地面に直接接すると病害虫にやられやすい）。さらに葉を切り落とした枝はインゲンマメの支柱にも利用されている。その他、灌漑水を有効利用するため水路の脇にも野菜が植えられている。

次に農場運営の形態を述べる。実際に農作業をしているのは、主にパキスタン、インド、バングラデッシュから来た出稼ぎ労働者である。オマーン人は土地は持っているが自身ではほとんど畑仕事はやらない。ではどのようなかたちで出稼ぎ労働者が働いているのか、以下にその形態を述べる。

- ①土地所有者に雇われ、月々給料をもらっている（約 R.O 70~75 /月、ちなみに R.O 1 = 約 300 円である）
- ②農地を借りている（例：R.O 120 / 5 エーカー / 月）
- ③売り上げを土地所有者と労働者で分ける（おおよそ 50 : 50 だそうだ）

以上、3つの形態に分かれる。実際にそれぞれの農場を視察したが、やはり①よりも②、③の農場が断然手入れが行き届き、整備されていた。②、③は作物の収穫量が直接彼等の賃金に結びつくので一生懸命働くのであろう。訪れた②の農場ではパキスタン人の親子が作業をしており、彼等は5エーカーの土地を借り、4エーカーを野菜栽培に、1エーカーをバナナの栽培に当てていた。この親子は息もぴったりと農作業をこなしていたが、機械化されかつ後継者不足の日本の農地ではなかなかお目にかかれない光景だろう。

しかし、最近では農薬や化学肥料が頻繁に使用されたり、センターピポット灌漑を利用した近代的牧草栽培による地下水の過剰汲み上げが原因で水位が低下し海水貫入が起こり、地下水の水質悪化が問題となっている。これら諸問題は農場で働いている人間のほとんどが外国人労働者であるということが大きな原因の一つであろう。すなわち彼等は今生産量が高ければいいのであって将来まで見越した土づくりに対する意識や、灌漑水の悪化に対する危機感は低いだろう。現在、外国人労働者に代わりオマーン人の雇用を拡大していこうとオマナイゼイション政策を推し進めているが、まだ農業労働者まで政策は浸透していない。しかし一日も早くオマーン人自ら農作業に従事する日が来ることを願っている。



水路脇に植えられたダイコン



ココヤシの枝を利用したインゲンマメの支柱栽培



親子で働くパキスタン人の出稼ぎ労働者